東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十三卷　第四號

大正十年十月一日發行

論叢

所得稅の弱點　法學博士　神戸正雄

社會的法的經濟學の考察　文學博士　米田庄太郎

利潤の經濟的及び道德的性質　法學博士　田島錦治

農業勞働問題　法學博士　河田嗣郎

時論

地方稅の整理を論ず　法學博士　小川鄉太郎

說苑

家計論の地位に就て　法學士　作田莊一

井リヤム・タムスンの分配論　經濟學士　堀經夫

雜錄

獨逸側より見たる聯合國の對獨經濟政策　法學士　小島昌太郎

世界戰爭と伯林の人口　法學士　汐見三郎

世界戰爭と伯林の人口*

汐見三郎

一　最近、伯林市の統計局は「千九百二十年に於ける伯林人口動態概況」と題する公刊物を發表した。本書は、表題だけ見れば、千九百二十年の一報告に過ぎない樣だが、實は戰前に遡り

Berlins Bevölkerungsbewegung in und nach dem Weltkriege (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 30. Juni 1921, S. 530-532)

千九百十三年より千九百二十年に至る迄の統計數字を蒐集せる、立派な研究である。獨逸の首府伯林に於ける人口が、世界戰爭の爲め如何なる影響を受けたかを研究するには、又と得難い好材料と云はねばならぬ。

以下、婚姻、出生死亡、死亡原因の各項に分ち、簡單なる紹介を試みる。

二　先づ婚姻より始めよう、蓋し、婚姻は健全なる家庭生活社會生活の基調をなすものであるから、第一に論ずる必要がある。

千九百二十年に結婚を屆出でた夫婦の數は、二八、三六九組である、千九百十九年の二八、三八三組と略々匹敵してゐる。千九百十三年の二一、一九四、戰爭の最初の年千九百十四年の二二、七〇二に比較すると、大した相違である、かの千九百十六年の一三、九六七の如きは、云はずもがなである。結婚數の此大波は、決して永續的のものでなく久しからずして停止するだらうが、それにしても住宅難の聲失業の叫の喧しき折柄結婚數激增の此事實あるを見れば、大に考へさせられざるを得ない、これ世界戰爭の齎せる社會の謎の一に數ふべきである。

一言注意して置きたいのは、此結婚數の增加に雁行して離婚數の增して行く事である。近頃の結婚が如何に輕卒の間に取運ばれるかは、是によつても窺はれるであらう。

三　次に出生死亡の問題に移る。

伯林に於ける千九百二十年の生產數は、二三、四六九人と云ふ多數を示してゐる。千九百十九年の生產數は二七、八二九人、千九百十八年には二〇、二二八人、千九百十六年には二二、七〇八人、千九百十五年には三〇、九九三人、千九百十四年には三七、四九三人、千九百十三年には四〇、八三三人の數に上る。最小限は千九百十七年であつて、僅か一八、七二五人の出生者あるに過ぎなかつた。

更に伯林市民の死亡數（死產數及び戰死數を除く）を計算すると、千九百二十年には三〇、九八二人に上つてゐる。千九百十九年に三一、三〇七、千九百十八年に三五、七六四、千九百

十七年に三四、一三八、千九百十六年に二七、一四七、千九百十五年に二八、五七二、千九百十四年に二九、六六四、千九百十三年には一八、〇六七を示してゐる。是で見ると、千九百十八年に死亡數が最高に達したのであつて、此年に戰爭が終熄するに至りし理由及び革命が何故に勃發せしかの事情は、數字的に實證せらるゝのである。

最も重要なるは、出生と死亡との比較である。伯林では千九百十六年に已に四、四二九の死亡超過を示し千九百十七年には一五、四一三に、千九百十八年には一五、五三六に上つた、獨逸が、大陸封鎖の結果たる困苦缺乏に屈服せざるを得なかつたのは、全く是が爲めである。世界戰爭と云ふ樣な大規模の戰爭では、軍人の數よりも寧ろ一般國民の人口が重要の地位を占め、從つて其增減は決して無視するを得ないのである。然るに獨逸に於ては、千九百十七年以來一般人口の死亡超過なる宿命的現象が全帝國を襲つたのである。大都市に於ては已に千九百十六年に現はれたが、其後中都市にも小都會にも同樣の現象を呈し、遂に帝國全部にわたり死亡超過の事實を見るに至つた。其後伯林に於ては、千九百十九年に死亡超過は三、四七八に下り、千九百二十年に入りては、返つて二、四八七の出生超過と云ふ反對現象を呈したのである。

然し見逃してはならぬ事實は、千九百二十年の出生超過も男子に於てのみ見らるゝ現象であつて、女子は返つて死亡超過である事である。かの二、四八七の出生超過も、實は女子の死亡超過一九四と男子の出生超過二、六八一より出來た數字なのである。これ千九百二十年のみに止まらず、千九百十九年及び其以前に於ても、同樣である、蓋し女子は、營養上經濟上、男子よりも遙かに劣等の地位に置かれ、稍もすれば流行性感冒、結核の危險に暴されたからである。勿論男子は、戰時中は戰場に召集せられ、戰後も俘虜戰死者多く、從つて本國にては女子特に成年女子が絕對多數を占めてゐたであらう。然し連年の女子死亡超過を以て、凡て成年

女子超過の結果なりと說明するのは、到底不自然なるを免れないのである。

四　死亡原因を乳兒の死、老人の死、不慮の死の三に分ち調べよう。

夏期の高溫なりし千九百十四年と千九百十七年とを除けば、乳兒死亡率は大體順調に千九百十九年迄進んで行つた、尤も出生率の減少の影響を受けた事は云ふ迄もない。伯林に於て滿一歳以下で死亡せし幼兒の數は、生產數一、〇〇〇に對し、千九百十三年に　一三七・三、千九百十四年は一五六・〇、千九百十五年には一四〇・七、千九百十六年には　一二八・二、千九百十七年には一五七・一、千九百十八年には一四一・四千九百十九年年には　一三一・六、千九百二十年には一五七・七である。以上は普通の調査方法による乳兒死亡率であるが、更に正確なる方法に基き千九百十三年乃至千九百十九年の乳兒死亡率を算定すると、數字は一三五・七、一五一・五、一三一・七、一一九・〇、一四七・八、一四七・四、一五三・五となる。千九百十七年の數字の大なるは、夏期の高溫なるにもよるが、かの封鎖が漸く威力を發揮し女親と幼き者を苦しむるに至りし事實を證明してゐる。千九百十九年の數字が、調査方法の如何により、大なる不同あるは、復員前後の出生數の極めて不定なるを示してゐる。

封鎖に續ける飢饉の爲め、老人の多數は其生命を失つたのである。七十歳乃至八十歳の人の伯林にて死せし數は、千九百十四年に三、六九九人であつたが、千九百十七年には六、一六〇に上り、其後千九百十八年には五、〇五五、千九百十九年には四、五五八、而して千九百二十年には四、二〇五と云ふ有樣である。八十歳以上の老人は、千九百十七年に殆んど死んで仕舞つたのである。此場合にも女子の死亡の多かりし事は別に說明する迄もない、これ一は老人には女子が多い爲めでもあるが、それにしても女子の死亡は餘りに高率に上り過ぎてゐる。

尙其他種々の死亡原因を數へる事が出來るが、凡てを省略し、茲には不慮の死だけを擧げ

て置く、自殺の含まれてゐる事は勿論である。不慮の死の最高は千九百十九年の二、六九四であつて、其中九一三には自殺の屆出がある、千九百二十年には一、八四〇、其中八六三が自殺であつた。千九百十九年の一月と三月との伯林の騷亂では、實に五九二人の男子と一一一人の女子の生命を犧牲にした、千九百二十年には、全樣にして男子一〇七人女子九人が倒れた。

五　戰爭の第一條件は金、第二條件も金、而して第三條件も金なりとは、多くの學者の唱ふる所であつた、世界戰爭に際しても、勿論かく信じてゐたのである。然るに獨逸は巨額の戰費を使用しSpandau塔中の金が心細くなれるに拘らず、勇敢に戰つた。何の爲めだらう。戰前より蓄積せし物資、戰時に節約せる食糧に急場を凌いだのである。茲に、第一條件に貨物を數へ、金は第二條件に落ちたのである。一擧に勝敗を決すべき戰は遂に持久戰となり、封鎖久しきに及び物資漸く缺乏を告げた、而も獨逸軍は他國に轉戰し、國內に聯合軍を一步だに入れなかつたのである。これ何に因るか、獨逸國民其人の力である。是に於てか、戰爭の第一條件は人、第二條件は物、第三條件が金となつたのである。

然るに、米國の參戰と共に、獨逸は遂に敗れた、金に窮し、貨物に乏しき獨逸は、第一條件たる人の力、特に人口狀態の險惡に遂に倒れたのである。壯年男子は戰場に死し、國內殘るは婦女子と老幼あるのみである。而して蟻の這ひ出づる隙なき聯合國の封鎖は、彼等殘れる者の頭上に及んだのである、死亡超過の現象は是であつた。獨逸一般國民の死亡超過、これで世界戰爭の幕は閉じた、戰敗國には問も無く革命が襲ひ、不慮の死自殺が續出して來た、失業、住宅難に不安の影がさしてゐる、而も戰後婚姻數の激增せる事は、實に皮肉ではないか、伯林の人口の近況、其は全獨逸の現在を語つてゐる。

以上Hans Guradzeの報告に多少の說明を加へた。戰敗國の首府の慘狀は、人口の變動を示す統計數字の上にも滲み出てゐる。（一〇九一三）